



森のちやれんがニュース

2020 春

Newsletter vol.19



第16回企画テーマ展『北海道神宮』 蔵出し展『模型でみる札幌建築物語』を開催（2020年2月8日～4月5日）

北海道神宮（旧札幌神社）は、2019年に創祀150年を迎えました。

本企画テーマ展では、その成り立ちから今日までの、境内や祭りの移り変わりについて資料をもとにたどりましました。また、1984年に北海道神宮より当館に寄託された考古・アイヌ民族資料もあわせて公開し、これらの資料の収集や、神輿渡御などの石版画制作に、6代目宮司・白野夏雲（1827-1899）が果たした役割を紹介しました。

展示室では、北海道神宮が収集していた数々の資料を、じっくりと見入るお客様が多く見受けられました。

同時開催の蔵出し展では、「北海道神宮」展と関連して、明治以降札幌市内で建てられた建物の模型を40点展示しました。精巧で華やかな模型が展示室を彩りました。

（研究職員 鈴木明世）



蔵出し展の展示風景



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
2点の船絵馬から読み取れる制作方法
- ③ インタビュー
博物館職員として最後に思うこと…！
- ④ 研究活動紹介
アイヌ音楽の調査・研究
- ⑥ はっけん広場 冬の活動報告
美りの副産物“わら”が大活躍！
展示紹介
蔵出し展「模型でみる札幌建築物語」を担当して
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
キーステン・レフシン資料の受け入れについて
- ⑧ 活動ダイアリー
2019年12月～2020年2月の記録

収蔵資料紹介

2点の船絵馬から読み取れる制作方法

田中 祐未

研究部歴史研究グループ 学芸員



資料1 収蔵番号：115660 吉本善京筆「奉納、慶応三年、丁卯六月吉日、嘉永丸、願主 右川屋惣兵衛」

みなさんは、神社や寺院に絵馬を奉納したことはありますか？—「ある」という声が、たくさん聞こえてきそうです。「ない」という方の中にも、他の人が奉納した絵馬、たとえば志望校合格や安産を祈願する絵馬を見たことがある方は多いのではないのでしょうか。絵馬は、神様や仏様に、願いや感謝の気持ちを伝えるためのものです。日本には、古くから絵馬を奉納する風習があり、奈良時代の遺跡からも絵馬が出土しています(岩井 1974:24*1)。

資料1は、北海道の日本海側に位置する、増毛町内の神社に奉納された絵馬です。ご覧の通り、画面いっぱいに和船が描かれています。船が描かれた絵馬は「船絵馬」と呼ばれていて、特に江戸時代から明治時代にかけて、全国の神社や寺院に奉納されました。奉納者は、主に船の所有者や船頭などです。奉納の目的は、神仏に向かって、航海安全や豊漁を祈願したり、それらの願いが叶ったことへの感謝を伝えたりすることでした。

江戸時代から明治時代にかけて奉納された船絵馬には、一定の様式で描かれたものが多く見られます。資料1のように、側面からみた船が画面中央に大

きく描かれていることが特徴です(石井 1977*2)。

これらを作っていたのは主に大坂の絵馬師で、全国から注文を受けていました。もとは画面全体を手描きで制作していましたが、それでは需要に応えきれなかったのでしょうか。嘉永2(1849)年、船絵馬師・三代目吉本善京は、効率的な制作方法を編み出しました。それは、(1)まず、船の黒い線だけを版木で刷る(2)次に、版画を絵馬板に貼り付ける(3)最後に、全体を手描きで仕上げる、という方法です(石井 1977:112-114*2)。

資料1もこの方法で作られています。貼り付け部分とその周辺との境界を絵具で巧みに隠しているため、一見すると版画が貼られていることには気づきません。

資料2も、当館の所蔵資料で、資料1と同じ神社に奉納された絵馬です。もと

もとは資料1のような状態で神社に奉納されたと推測されますが、当館に収蔵されたときには、すでに長い年月を経て板が割れ、版画の部分が剥がれてしまった状態でした。

資料2を見ると、版画の貼りがよくわかります。船の黒い線を刷った版画を、船より少し大きめに切り抜いています。版画部分の下には白い紙が見えているので、絵馬板に大きな紙を貼ったあとで、その上から版画を貼り付けていたということもわかります。この資料は、破損したと片付けてしまえばそれまでですが、捉え方を変えれば、制作方法を教えてくださいという点で、とても貴重です。ほぼ完全な状態で残っている資料1、破損したことによって制作方法を語ってくれる資料2、どちらも大切に保存していきたいと思えます。

今年の夏には、総合展示室のクローズアップ展示で船絵馬をご紹介します予定です。お楽しみに。



(資料1を一部拡大) →たとえば、この線は版画

*1 岩井宏美 1974. もの与人間の文化史12 絵馬. 法政大学出版局.

*2 石井謙治. 船舶画としての船絵馬とその流派 1977. 海と日本人. 東海大学出版会. p101-125



資料2 収蔵番号：115662

インタビュー

博物館職員として最後に思うこと…！

村上孝一さん

博物館研究グループ 学芸員

麻生典子さん

道民サービスグループ 解説員

司会：こんにちは。長年博物館に貢献されてきたお二人に、退職前のインタビューをさせて戴きます。

まず、お二人は、いつから博物館に勤められたのかを伺います。

村上孝一さん：私は、昭和56(1981)年6月に、当時の北海道開拓記念館(以後、開拓記念館)開拓の村整備室に入りました。今年で39年目ですが、そのうち約35年間、開拓の村の建造物に関わってきました。



麻生典子さん：私は、昭和53(1978)年8月からなので42年目です。開拓記念館事業部の普及課に配属され、それ以来、解説業務を続けてきました。



司会：村上さんは、どのような建造物を担当してきたのですか。そして、建造物の移築・復元や再現をしてきた中で苦労したことを教えてください。

村上さん：開拓の村整備計画で示された40棟以外に、修景展示という9棟、補完的整備など3棟の計52棟を、主に2人の学芸員で担当してきました。廊下、はね出し、たたみ倉など修景展示の建造物の中には、北海道の建物の歴史を見る上で注目すべきものもあります。

意外かもしれませんが、入植当初の開拓小屋とか、急場しのぎのものが難しかったと思っています。本来、建造物は快適に長く住むことを意識しますから、建材も良く吟味して建てられます。復元する時は、同じように建てれば良いわけ。でも開拓小屋は数年しか使わない。ただ野外博物館の展示物にするわけですから、見た目は掘立小屋風でも、見えないところでは長く持たせる工夫が必須でした。ほかにも、萱や桎などの材料や職人の確保、漆喰の補修や雪害対策などあげたらきりがありません。

司会：課題はたくさんあるんですね。
村上さん：北海道の場合は、積雪寒冷の気候に合った工法に早くから変わったため、本州以南に比べて古い技術を持った職人が少ないのです。今後、伝統的な技術を持った職人を確保することは、ますます難しくなるでしょう。開拓の村だけではなく、道内外にある歴史的建造物を含めて全国的な視点を持って、伝統的な建築技術を継承させていく、同時にそれに関わる人材を育てていくことが急務です。

司会：村上さん、ありがとうございます。
麻生さんは、昭和46(1971)年にオープンした開拓記念館の常設展示と、平成4(1992)年にリニューアルした常設展示、そして、平成27(2015)年に北海道博物館としてオープンした総合展示、と3つの展示室の解説を担当してきました。それぞれの展示解説の思い出についてお話しいただけますか。

麻生さん：オープン後、7年目から勤めましたが、この頃の博物館は古いものを陳列している所というイメージでした。しかし、開拓記念館の常設展示には随所に親しめる展示があって、古いイメージを払拭する構成でした。当時、

札幌には観光施設が少なく、沢山のお客様をお迎えしましたが、北海道の歴史を楽しみながら観覧いただけののではないのでしょうか。

平成4(1992)年のリニューアルの頃には、北海道に関する研究が進んで、研究成果が反映された展示になったと考えています。お客様からは、専門的な質問が増えましたし、展示観覧の時間が足りないという声もよく聞きました。これは、今の展示にも通じています。

司会：解説にあたって、これまで気をつけてきたことは何でしょう。

麻生さん：当館は、交通の便が悪いところにあります。そのようなところに来てくださった方々が、気持ちよく過ごすことができ、来てよかったと思っていただきたい。そのためのお手伝いができればと考えています。来館される方は、歴史に興味のある方ばかりではなく、興味のない方も沢山いらっしゃいます。そのような方が来館をきっかけに歴史に興味を持ち、さらに帰った後も興味を広げていって貰えたらと思います。私たちの解説が歴史に興味を持つきっかけとなれば嬉しいです。

また、そのためにはさまざまな質問に対応できるよう、日々の自己研鑽も大切です。解説員は、「博物館の顔」ということを意識して、お客様と対話していくことが重要と考えます。

司会：それぞれ、お二人にまとめていただきましたが、お客様の対応にしても、村の建物の維持管理にしても、細かく配慮していく体制が必要だと改めて感じました。お二人の仕事を体験することは難しいかもしれませんが、常に心がけていきたいと思います。

長年のお勤め、本当にお疲れ様でした。
(文責 舟山直治)

研究活動紹介

アイヌ音楽の調査・研究

甲 地 利 恵

アイヌ民族文化研究センター 研究主幹



1962年室蘭市生まれ。
1994年より北海道立アイヌ民族文化研究センター、2015年より北海道博物館に勤務。専門は音楽学（民族音楽学）。アイヌ音楽を研究。

1994（平成6）年に旧北海道立アイヌ民族文化研究センターに就職して以来、アイヌ音楽の調査・研究に携わってきました。これまで私が主に取り組んできたことの概要をお話しします。

* * *

就職直後から10年くらいは、北海道内各地で、当時70～80代の方たちを訪ね、それぞれ伝承される歌・踊りや、それらに関わる昔の体験や伝統行事の記憶などについてのお話の採録（録音・録画）を主に行いました。

お話をうかがった方たちの多くは、物故されています。もっとこういうことを質問しておけばよかった、と悔やまれることも多いですが、今となっては致し方ありません。ともかくも当時の調査記録は許諾を得られたものから順次、公開用の資料に作成していきま

した。これらは現在、当館の図書室で視聴できます。また旭川と鶴川での調査については、それぞれCD付きの報告書にまとめています。

* * *

こうした聴きとり調査と並行して、伝統的なアイヌ音楽の演奏を聞くことのできる、20世紀以降の音声資料の情報収集や内容調査も少しずつ行ってきました。アイヌ音楽を録音した資料があることはそれまでも知られていましたが、ばらばらな情報をどう整理していくかが課題でした。

そうした中から、2018年にはアナログレコード盤が主流の時代に公刊された音声資料27件について「アイヌ音楽の音声資料-公刊されたアナログレコード盤-」としてまとめました。これは当館のウェブサイトにも掲載しています。

直近では上記の成果を活かし、国立国会図書館のウェブサイトにも、戦後間もなく日本放送協会が収録・制作したアイヌ音楽のレコード集（『アイヌ歌謡集』『樺太アイヌの古謡』ほか）についての紹介記事「**「歴史的音源」で聴けるアイヌの芸能について**」を執筆しました。同図書館では、1900～1950年代頃に制作・発行されたSPレコード盤等の音源を保存活用のためにデジタル化し、「歴史的音源」として同館内及び配信提供参加館（道内では現在6機関）で公開しています。この記事が、アイヌ音楽に興味がある人はもちろん、初めて聴こうとする人の理解の手助けに少しでもなれたらと願っているところです。

* * *

さて、アイヌ音楽と一口に言ってもその内容は多岐に渡っています。広く舞踊や器楽も含まれる中で、私は主に声を用いる音楽、つまり歌について調査・研究をしてきています。

比較的古い時代の録音を聴くと、同じ歌詞を歌っているものでも、現在とは印象の異なる演奏スタイルで行われていることがわかります。なかでも、細かい声の技巧が生み出す多彩な音色は、それ自体がアイヌ音楽の特徴であり、魅力です。このことは現代の若手の伝承者にも意識されていて、昔の録音資料に聞かれるような技巧と味わいを自らの理想として研鑽を重ねる歌い手が徐々に増えてきている、と感じています。

近年よく問われるようになったのは「アイヌの歌らしく歌うための発声（声の技巧）をどうすればよいか」という、実践にかかわる重要なことが



公開用の資料（CD）



旭川地方・鶴川地方での採録調査の報告書（2005年・2009年）

らでした。アイヌ音楽の特徴的要素の一つとして、声の技巧については探求解明していくべき課題です。可能なかぎり応える努力はしつつも、歌手一人ひとりの声の個性や、地域・時代によってもさまざまなスタイルがあることを考えると、簡単に結論できることでもありません。試行錯誤しながら、一つ一つの事例について分析を積み重ねています。そしてそれを、現代における伝統的なアイヌ音楽の学習にどう活かせるのか、どういう方法がより適切なのか、慎重に考えていかねばならないと思います。

* * *

声の技巧の要素以外にもアイヌ音楽がアイヌ音楽らしく聞こえる、音楽構造上の特徴があるのではないかと、いくつかの観点から音楽分析を試行してきました。

たとえば、複数の歌手が異なる高さの音を同時に歌う状態を生み出している曲と形式は、アイヌ音楽の特徴の一つでもあります(「ウコウク」と呼ばれる歌い方は比較的良好に知られていますが、その一つです)。こうした音の重なりを生む音楽構造から歌唱形式を大きく4種に分類する考え方を2012年に発表しています。

歌の旋律全体が5拍や7拍や9拍などの奇数拍節でできているものがあることにも着目しました。同じ旋律でも奇数拍に聞こえたり偶数拍になったりなどの揺れも見られますが、2つの声部間で交互に一つの旋律を繰り返す形式との関わりで結果的にそうなるものもあるのでは、という仮説を提示しました(2017年)。ともあれ、奇数拍節の旋律もアイヌ音楽の特徴の一つといえます。

歌詞のアイヌ語と旋律との結びつき方についても分析を進めています。いわゆる歌よりも、物語を旋律に載せて語る音楽の方が、言葉で内容を伝える必要がより高い点で、この問題を考察する対象として適切と考えました。以前にもアイヌの「神話」と呼ばれるジャ

ナルの語りの旋律分析を行ったことがあります。しばらく中断していたので、昨年から少しずつ再着手しています。成果を出すのはまだ先のことになりそうですが、博物館内外のいろいろな意見や指摘を仰ぎながら、進めたいと思っています。

* * *

ところで、これまで私は、楽器による音楽については情報収集に留めていました。楽器は、音楽という無形文化の一面を有形のモノとして捉えることのできる重要な要素ですが、楽器の研究には、音楽学に加えて音響物理学その他の諸学にも知悉することが必要で、単独で同時にできることではないと自覚していたからです。

また、アイヌ音楽(の中でも歌)に焦点を絞っていたのは、研究のための軸をきちんと確立しないまま比較研究に踏み出すのは危険だと自覚する気持ちもありました。

しかし最近の音楽学(民族音楽学)の世界的な流れや、アイヌ文化をめ

ぐる状況の変化などもふまえ、楽器も含めた総合的な音楽情報の収集整理や、それを世界的な視野の中で捉える意識も必要になってきました。諸文化における楽器のあり方を手がかりに、それが奏でる音色や旋律の生成にも意識を向けることは、歌の研究にも、また多文化間の音楽の比較研究的視点の醸成にも、活かすことができるのではないか、と考え始めているところです。

* * *

北海道博物館では4月25日から第17回企画テーマ展「楽器 見る・知る・考える」を開催予定です。これは、音を出す道具(音具)を手がかりに、広く楽器について考える契機となることを目指す展示です。私が現在進めている研究課題*の一部成果等も反映させ、当館の所蔵する楽器資料を紹介するほか、鹿笛研究の第一人者で楽器学に造詣の深い栢谷隆男さんの協力を得て、そのコレクションも併せて展示します。さらに関連行事として、アーティストのOKIさんによるトンコリ演奏会、前述の栢谷隆男さんや音楽考古学の荒山千恵さんをお招きしての講演会なども、実施する予定です。

* 北海道博物館による「アイヌ文化に関する基礎的・総合的・学際プロジェクト」(令和2~6年度)、並びに科学研究費助成事業基盤C(一般)18K01183「アイヌ音楽の旋律分析研究、及び北方諸民族の音楽との比較研究に向けた基礎的調査」(2018~2022年度、研究代表者:甲地利恵)

北海道博物館 第17回企画テーマ展

楽器 見る・知る・考える

—北海道博物館資料+栢谷隆男氏コレクション—

2020(令和2)年 入場無料

4月25日土~5月24日日

休館日 ●4月27日(月)・5月7日(木)・11日(月)・18日(月)

開館時間 ●4月=9:30~16:30、5月=9:30~17:00 ※入場は開館の30分前まで

会場 ●北海道博物館 2階 特別展示室

アタセキ室はのユビタイトを
ご覧ください。

www.hm.pref.hokkaido.lg.jp

主催 ●北海道博物館
協力 ●栢谷隆男氏・北海道立北方民族博物館

北海道博物館
森のちやれんが HOKKAIDO MUSEUM
札幌市厚別区厚別町小野橋55-2 TEL.011-268-0466(総合案内)

特別イベント
「アイヌ音楽ライブ
トンコリ演奏会」
4月26日(日)12:00開演
北海道博物館 1階 記念ホール
申込不要

入場無料

トンコリ演奏家 OKIさん
(アーティスト、トンコリ伝承者)

はっけん広場 冬の活動報告

実りの副産物“わら”が大活躍！

北海道は明治以降に稲作が本格化し、今では日本有数の米どころ？！たくさん作られたお米の副産物として“わら”もたくさんあり…そうですが、実は機械刈りの現在、わら細工に適した長いわらの入手は難しいのです。当館では、農業試験場の方をお願いして昔ながらの手刈りわらをいただいています。その貴重な“わら”を使うイベントを豪華2本立てで企画しました！

まずは年末恒例の“しめ縄づくり”。



しめ縄づくり

毎年楽しみにされている常連さん。ドキドキの初心者さん。様々な方が、わら束と格闘の末、立派なしめ縄を完成させていました。「来年も参加したい！」と、もう1年先の予定を心に刻むほど皆さま喜んでくれます。

年が明けて1月からは“ワラでミニほうきをつくろう！”。様々な生活用具に加工された“わら”ですが、蓑や草履よりも今の暮らしに取り入れやすいほうきは“わら”のよさを実感してもら



ほうきをつくろう

えるのではないかと考えました。冬休み期間なので子ども向けに簡単な仕組みにしましたが、実際に作ってみると…苦戦する姿も目立ちました。それでも、出来上がると早速初仕事！机の上をきれいにお掃除してくれて、満足感、達成感を味わっていました。

しめ縄で歳神様をお迎えし、ほうきで悪い運気を掃き出して、皆さま、実り多き1年になりますように。

(解説員 辻 幸恵)



展示紹介

蔵出し展「模型でみる札幌建築物語」を担当して

北海道博物館には、明治以降に北海道で建てられた建築の模型が100点以上収蔵されています。そのほとんどが、平成27(2015)年に寄贈を受けた、グラフィックデザイナーであった故・原田英三氏製作の模型です。これらの模型は、小さいながらも精巧に作られており、北海道の建築を語る貴重な記録の一つになっています。収集以降、総合展示室のクローズアップ展示などで少しずつ公開してきましたが、多くの模型を並べて一覧する機会はありませんでした。



原田英三氏制作の模型は非常に精巧

そこで、第16回企画テーマ展「北海道神宮」の開催とあわせ、蔵出し展として未公開であった札幌市内の建物を一挙に公開することにしました。今回は計40点の建築模型の展示と、建物をより深く知るための職人技術を紹介し、企画テーマ展とともに見ることで、札幌の明治～昭和の建物やまちなみの移り変わりに、より深く思いを馳せることができるようになりました。

今回展示した模型はほとんど現存しており、実物を見ることができます。そこで、展示会としては、普段は見る



柿葺(葎葺)屋根職人の技術紹介

ことのできない角度から建物を細部までじっくりと観察したり、他の建物と比較したりと、模型ならではの楽しみ方ができるように構成を工夫しました。

展示場でのお客様の声や、ご回答いただいたアンケートでは、様々な楽しみ方をしてもらい全体的に満足度の高い展示会になったように思います。ご覧になった方々が、改めて実物を見に行くなど、建物に興味を持っていただければ幸いです。

(研究職員 鈴木明世)



大正期の札幌のまちなみ再現模型

アイヌ民族文化研究センターだより

キーステン・レフシン資料の受け入れについて

このたび北海道博物館は、デンマーク・コペンハーゲン大学のキーステン・レフシン名誉教授によるアイヌ語調査資料を受贈しました。整理と公開作業はこれから順次進めてまいります。ここでは第一報として、寄贈者の経歴とアイヌ語調査の歩み、資料の概要と具体例そしてアイヌ語の研究・学習についての意義を紹介します。

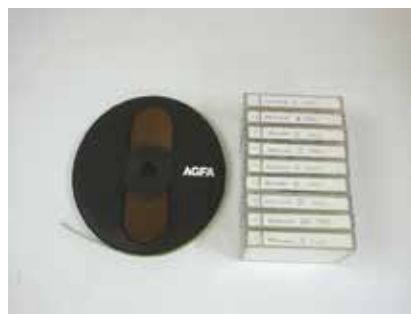


(2015年、ご自宅にて)

キーステン・レフシン教授はデンマークに生まれ、コペンハーゲン大学で日本語を学んでいた1968年から69年にかけて初来日しました。来日前後からアイヌ語に関心を持ち、翌年には北海道でアイヌ語の調査を行っています。いったん帰国したのち1970年から71年には文部省の国費外国人留学生として再来日し、アイヌ語の調査を行うとともに多くの文献や資料を収集しました。このときまでに集めた資料の目録はAn Annotated Catalogue of Ainu Material (Studentlitteratur, 1974)として公刊されています。母校に戻って日本語の研究で修士とその上位の資格であるMagisterの学位を取得したのち、1977年から1979年にかけては旭川大学で英語と日本古典文学を教えました。1980年と1981年にも来日してアイヌ語静内方言の調査を行い、主にその成果に基づいて、オーフス大学に在職中の1986年に博士論文The Ainu Language (Aarhus University Press)を発表しました。その後コペンハーゲン大学、香港

大学を経て2006年には母校の人文学部長となり、2015年に退職して名誉教授の称号を得ています。このかん1996年から2002年にかけて、欧米の言語で書かれたアイヌ研究文献を詳細な解題とともに集成したThe Ainu Libraryのシリーズを刊行するなど、欧米圏を代表するアイヌ語研究者として活躍してられました。(以上は既刊の文献に加えレフシン教授ご自身が口述した回想に基づいています。)

レフシン教授によるアイヌ語調査資料は、カセットテープ、オープンリールテープなどの音声資料、調査当時の筆録ノートその他からなります。音声資料の古いものは1969-70年の調査にさかのぼりますが、中心を占めるといいのは、1980年から1981年にかけて行われた、アイヌ語静内方言の話者である織田^{おりた}ステノさんに対する調査の録音です。そのなかでは、アイヌ語の物語に加え、アイヌ語の文法を網羅的に調査すべく用意された日本語の例文に対して話者がアイヌ語の訳文とその説明を語っています。織田さんは多くのアイヌ語・アイヌ文化研究者の調査に協力したことで知られ



(1980-81年の調査テープの一部)



(1980年の調査ノートの一部)

ていますが、残したアイヌ語の録音の多くは物語であり、また日常会話の音声資料はアイヌ語の他の方言をみてもわずかな記録しかありません。アイヌ語の研究、教育そして学習にとって、レフシン資料はこれから大きな役割を果たすでしょう。

音声テープは経年劣化しやすく、またオープンリールテープなどは再生できる機材も生産中止になっています。そこで博物館ではハードディスクなどに複製してデジタル保存の措置を講じます。そして調査ノートなどと対照しながら内容の概要を確認し、とくにプライバシーなど利用に供しない箇所を除いてから、順次公開していく予定です。

(アイヌ民族文化研究センター
非常勤研究職員 奥田統己)

活動ダイアリー

2019年12月～2020年2月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

12月1日(日)

■子どもワークショップ「文字であそぼう♪消しゴムはんこづくり」を開催。担当：田中祐未・三浦泰之・水島未記。

12月7日(土)

■子どもワークショップ「貝の化石で標本をつくろう!」を開催。担当：圓谷昂史、畠誠氏。

12月8日(日)

■アイヌ語講座「アイヌの物語を聴いてみよう」を開催。担当：大谷洋一。

12月15日(日)

■ミュージアムカレッジ「歴史の中の「声」を聴く：北海道アイヌ協会創設のころ」を開催。担当：小川正人。

12月21日(土)

■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。

①北のシルクロード：サンタン交易と蝦夷錦



②新しく仲間入りした歴史資料たち



③関東におけるアイヌ文化の活動



④モノから見るアイヌ文化―耳飾りのいろいろ



⑤看板あれこれ



⑥「すまい」を彩るタイル



⑦北海道にいるのいないの？ モグラの仲間



12月22日(日)

■ちゃれんがワークショップ「博物館で新年祈願!? 日本の画材で絵馬づくり」を開催。担当：田中祐未・三浦泰之・水島未記。

12月25日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：右代啓視・奥田統己。

1月4日(土)

■はっけんイベント「ワラでミニほうきをつくろう!」が開催(～19日(日)の開館日毎日、1月25日(土)～2月11日(火・祝)の土曜日・日曜日・祝日)。



1月9日(木)～10日(金)

■CISEネットワーク「サイエンスフェスティバル」於：札幌地下歩行空間。

1月11日(土)

■アイヌ語講座「じっくり!「見て聞いてアイヌ文化の世界」」を開催。担当：遠藤志保

1月18日(土)

■特別イベント「博物館のバックヤードを見よう」を開催。担当：杉山智昭・山際秀紀。

1月25日(土)

■子どもワークショップ「雪のなかで宝さがし」を開催。担当：舟山直治・池田貴夫。

1月26日(日)

■特別イベント「博物館のバックヤードを見よう」を開催。担当：杉山智昭・山際秀紀。

1月29日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：青柳かつら・大谷洋一。

2月8日(土)

■第16回企画テーマ展「北海道神宮」が開幕。(～4月5日(日))



■蔵出し展「模型でみる札幌建築物」が開幕。(～4月5日(日))



■ちゃれんがワークショップ「羊毛を紡ぐ①」を開催。担当：尾曲香織・会田理人・池田貴夫。

2月9日(日)

■彬子女王、総合展示、企画テーマ展・蔵出し展視察。

■ちゃれんがワークショップ「羊毛を紡ぐ②」を開催。担当：尾曲香織・会田理人・池田貴夫。

2月13日(木)

■北のミュージアム活性化実行委員会主催「研修会「視覚障がいに対応した博物館づくりにむけて」」を共催。

2月15日(土)

■はっけんイベント「指織りで毛糸のプレスレットをつくろう」を開催(2月15日(土)～3月の土曜日・日曜日・祝日、2月24日(月・祝)以降中止)。



2月16日(日)

■ミュージアムカレッジ「渡島半島に暮らしたアイヌ民族の歴史と文化」を開催。担当：大坂拓。

2月17日(月)

■慰霊行事(イチャルパ)を実施。

2月22日(土)

■企画テーマ展関連講座 於：北海道立図書館 図書館利用講座 講師：舟山直治。

2月26日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：村上孝一

2月29日(土)

■新型コロナウイルス感染拡大防止のため当面休館。

■自然観察会「雪の森で動物を探そう!」開催中止。

来館者数

○2019年12月～2020年2月
 総合展示室 9,335人 特別展示室 6,801人 はっけん広場 1,778人
 ○累計(2015年4月～2020年2月)
 総合展示室 515,833人 特別展示室 386,167人 はっけん広場 120,784人

森のちゃれんがニュース 第19号

発行日：2020年3月26日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2020